



営農NEWS



水稻の育苗箱施薬を行って、水田の初中期に発生する病害虫を防除しましょう

良品質の米を多収生産するためには、品質低下や減収を招く病害虫や雑草の防除を適切に行うことが重要です。

水稻栽培の初～中期における病害虫防除は、現在、予め移植前に育苗箱へ薬剤を処理することで、長期に、安定した防除効果を発揮させる技術が普及しています。この処理法は、本田での薬剤防除に比べて簡便で省力的であり、周辺環境へ与える影響も小さい安全な防除法として広く定着しています。また、作業の効率化を考慮して、使用時期や処理法については多種の方法があり、作業体系に応じた処理方法や各種薬剤を選ぶことができます。

ここ数年、県西・県南地域を中心に、ヒメトビウンカがウイルスを媒介するイネ縞葉枯病の発生が徐々に増加しています。また、県内には、いもち病の発生、イネミズゾウムシやイネドロオイムシの食害、ニカメイチュウによる心枯れ、イネツトムシの被害などが発生し、地域によっては常発化する傾向もあります。このため、これら常発地では、水稻の初～中期病害虫を確実に防除する育苗箱施薬を行うことが重要となります。

なお、薬剤を選ぶにあたっては、常発する病害虫を対象に絞る必要があります。発生の少ない病害虫まで対象にすると、無駄な経費をかけるだけでなく、過剰処理により耐性菌や抵抗性害虫の出現を招く恐れがありますので、注意が必要です。

＜育苗箱施薬を行う時の注意点＞

- 1 田植え前の処理では、葉が濡れていると薬害を生じやすいので、露を払ってから所定量の薬剤を均一に散布します。その後、葉に付着した薬剤を払い落とし、軽く散水などを行って、育苗土の表面に薬剤を落ち着かせます。
- 2 軟弱徒長苗や老化苗は、薬害の発生する恐れがありますので、注意が必要です。
- 3 後作を栽培するハウスなどでは、薬剤が地面にこぼれて後作物で農薬残留する恐れがありますので、ビニルシート等を敷き、薬剤が土壌に残留しないように注意しましょう。

表 1 水稻における各種病害虫防除の主な育苗箱施薬剤（平成 29 年 4 月 11 日現在）

薬 剤 名	使用時期／使用回数	育苗箱一箱当たり使用量 (g)	いもち病	イゾネウミムズシ	イオネイロシ	ウンカ類	ツヨマガバロイ	ニチカメウイ	その他の対象病害虫
アドマイヤーCR箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日／1回	50		○	○	○	○		イネヒメハモグリバエ、イネクロカメムシ※など
スターダム箱粒剤	移植3日前～移植当日／1回	50		○	○	○			イネカラバエ
ダントツ箱粒剤	移植3日前～移植当日／1回	50		○	○	○	○	○	フタオビコヤガ、イネヒメハモグリバエ
フェルテラチェス箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日／1回	50		○	○	○	○	○	イネツトムシ※※、フタオビコヤガ※※、コブノメイガ
デジタルメガフレア箱粒剤	移植前3日～移植当日／1回	50	○	○	○	○	※	※	
ロングリーチ箱粒剤	移植3日前～移植当日／1回	50	○	○	○	○	○		フタオビコヤガ
ビームアドマイヤー一粒剤	移植2日前～当日／1回	50	○	○	○	○	○		
ダントツオリゼメート10箱粒剤	移植3日前～移植当日／1回	50	○	○	○	○	○	○	
スタウトダントツ箱粒剤	播種時（覆土前）～移植当日／1回	50	○	○	○	○	○	○	白葉枯病、もみ枯細菌病、内稃褐変病、フタオビコヤガなど

注）表中※印を付した対象害虫は、使用時期が移植当日です。また、フェルテラチェス箱粒剤の※※を付した害虫は移植3日前～移植当日です。なお、各薬剤の取り扱いについては、お近くの農協に問い合わせてください。

- ◎ 育苗箱施薬を行った場合でも、年によっては病害虫が予想を上回って多発生したり、長期化することがありますので、適宜、水田を見回って多発生が予想される場合には本田防除を行ってください。なお、その際は耐性菌や抵抗性害虫の発生を抑制するため、育苗箱施薬とは異なる系統の薬剤を使用してください。

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040